

# キム・チュイ『満ち足りた人生』における女性の表象

大羽里沙

## 序論

本稿では、ベトナム系カナダ人の作家キム・チュイ (Kim Thúy, 1968-) の3作目にあたる『満ち足りた人生』(Mãn, 2013) を取り上げる。チュイは、ベトナムで生まれ、10歳の時に難民としてカナダのケベック州に移住し、フランス語で作品を執筆している。デビュー以来カナダやフランスの文学賞を数多く受賞し、2018年にはノーベル文学賞の代替として設立されたニュー・アカデミー文学賞の最終候補者にノミネートされた。受賞には至らなかったものの、彼女の作品への注目がフランス語圏にとどまらず世界中に広がっていることの表れであるといえる。

ケベック文学は1960年代以降のネオナショナリズム運動の一環として発展し、女性作家による文学作品は女性の解放や権利拡大を後押しする役割を担ってきた。1980年代以降、ケベックへの新規移民が増加し移民作家の活躍が見られるようになると、移動文学 (écritures migrantes) という新たなジャンルが登場した。チュイもケベック移動文学における重要な作家の1人であり、第1章第2節で取り上げるように、これまでに彼女の移住経験や難民経験に関する語りや言語習得に関して多くの研究が行われている。『満ち足りた人生』についても、様々な先行研究があるものの、主人公の人生や成長を支える女性登場人物たちに着目した研究は行われておらず、女性文学の視点からの研究も行われていない。そこで、本稿では女性登場人物たちの表象と主人公への影響を分析し、既存のケベック女性文学作品研究を踏まえて作品の位置付けを考察する。

## 1. 作品と先行研究

### 1.1. 作品について

『満ち足りた人生』の主人公であるベトナム人女性マン (Mãn) の名前は、ベトナム語で「完全に満たされている」、「他にもう何も望むことがない」、「す

べての願いがすでに聞き入れられた」という意味を表しており、マンはその名前ゆえに何も望むことができないと考えている。本作品は、マンがケベックでベトナム料理店を営む男性との結婚を機にケベックへ移住し、ベトナム料理のレシピ本の出版で成功を取める中で、様々な人との出会いを通して変化していく姿を描いている。物語の後半では、レシピ本を通して出会ったフランス人シェフのリュックと愛人関係になり、マンが初めての恋愛を通して自分の感情や行動の変化を感じはじめ、彼と別れた後もその影響を感じ続ける様子も描かれている。

このように、本作品は、結婚による移住や、愛人との出会いなど、男性と関わることによってマンの人生が大きく変化しているように感じられる一方、男性登場人物たちの存在感はあまりなく、夫に限っては、名前が明かされることはない。むしろ、作中では女性登場人物たちとマンの関わりや、彼女たちに影響されたマンの姿が詳細に書かれており、女性登場人物たちの存在感はこの作品の特徴の一つであると考えられる。

## 1.2. 先行研究の紹介

キム・チュイの作品は、フランス語圏だけでなく日本を含む世界中の様々な地域において研究されている。日本では、『小川』(Ru, 2012)や『ヴィという少女』(Vi, 2016)を取り上げた研究や移動文学の視点から分析した研究があるものの、『満ち足りた人生』を取り上げたものではなく、女性文学という視点から作品や作家の特徴を分析した研究もない。一方、フランス語では『満ち足りた人生』に関する研究が存在しており、料理と女性性を結びつけて論じている研究も存在する<sup>1)</sup>。しかし、女性登場人物に着目した研究やケベックの女性文学という視点からの研究は行われていないため、本稿では作品における女性登場の表象と主人公への影響を分析し、ケベックの女性文学における作品の位置付けを考察する。

## 2. ケベックの女性文学

本章では、先行研究からケベックの女性文学の歴史と特徴をまとめる。本稿では、女性文学を女性作家によって書かれた作品かつ女性が主人公である作品として論じていく<sup>2)</sup>。

## 2.1. 歴史

ケベック文学の歴史は、カナダ国内の英語文学と比較しても新しく、有名な作品の多くが20世紀以降に出版された。ケベック文学は、英系が多数を占めるカナダにおいて少数派である仏系の生き残りを目指すナショナリズム運動の一環として発展し、アイデンティティを模索する手段として存在していた。1960年代の「静かな革命」以前のケベックは、キリスト教カトリックの影響が強く男性が権力を持つ社会であったため、女性に求められるのは家庭を守る母としての姿であり、文学作品でも女性たちは男性が理想とする姿で描かれていた。「静かな革命」を経てケベック社会でのカトリックの支配が弱まると、女性の役割も見直されるようになり、活躍が見られるようになった。一方文学の世界では、それ以前の1945年に発表されたGabrielle Roy, 1909-1983の『かりそめの幸福』(*Bonheur d'occasion*, 1945)以降、1950年代から仏系カナダ人女性作家の活躍が見られ、伝統的女性像から解放された新しい女性たちが登場する作品が描かれるようになった<sup>3)</sup>。

1980年代には、ケベックへの新規移民の増加により移民作家による作品が登場し、ケベック移動文学という新たなジャンルを生み出した。ここでも女性作家の活動は活発であり、1980年代に登場したアラブ系やユダヤ系の移民女性作家たちは、それまでに見られた女性の権利を主張する内容から離れ、言語、文化の違いによる疎外感やアイデンティティの問題をテーマにしている。1990年代にはアジア系移民作家による作品が登場し、2000年代後半からは本稿で取り上げるキム・チュイなどのベトナム系や、ハイチ系の移民女性作家による作品も注目を集め、ケベック社会の多様性が女性文学にも現れている<sup>4)</sup>。

## 2.2. 特徴

女性文学が登場した当初は、家父長制批判や女性の権利主張、アイデンティティの模索など直接的なフェミニズム作品が多く書かれた。しかし、1980年代以降は、女性の権利を求める運動が成功し女性の社会的地位が確立されたことにより、文学でも過激なフェミニズムをテーマにした作品から、具体的で個人的なテーマの作品へと変化が見られるようになる。例えば、母親と娘の関係、女性のための歴史の書き換え、アイデンティティの問題、暴行と暴力、いたずらっ子の娘、移住と亡命、ずれと分離などのテーマが書かれるようになる<sup>5)</sup>。このようなテーマの多様化は、ケベック女性文学の1つの特

徴であると言えよう。

もう1つのケベック女性文学の特徴として、自伝的である点があげられる。ケベックの女性運動は、同じフランス語圏であるフランスと、隣国アメリカの影響を受けて発展した。フランスからは「女性の文体 (écriture féminine)」の影響を受け、アメリカからは、フェミニズム運動のスローガン「個人的なことは政治的である (The Personal is Political)」の影響を受け、個人的な事柄も公の場で語られるべきだとして、自伝的作品が多く書かれた<sup>6)</sup>。

### 3. 作品における女性登場人物の分析

本章では、作品に登場する女性登場人物の分析を行う。『満ち足りた人生』には多くの女性たちが登場するが、ここでは物語での登場頻度が高く主人公に大きく影響を与えていると考えられる3人の母親、ジュリー (Julie)、ホン (Hông) を中心に分析を進める。

#### 3.1. 3人の母親

本節ではマンの母親たちを取り上げる。マンには、産みの母、マンを捨ててくれた母、マンを育てた教師でありバナナ商人でもあった母の3人の母親がいる。マンは、3人目の母を「ママ (Maman)」と呼び他の2人の母親と区別している。1人目と2人目の母親とは、マンが幼い頃に別れており物語での登場頻度も低く、マンの人生に与えた影響も少ないと考えられるため、本節ではママに焦点を当て分析を進める。

マンが、「ママは私に第二の人生を与えてくれた<sup>7)</sup>」と語っているように、ママが彼女の母親になったことは、その後の人生に大きな影響を与えている。例えば、マンと夫はママの女友達の仲人を通じて出会い、結婚を決めた。その過程では、マンの考えは重視されず、マンにとって父親のような存在になれる男性を探していたママの意向が重視されている。そのため、マンと夫が初めて2人きりで話をしたのは結婚が決まった後だった。このように、マンの結婚がママ主体で取り決められていることから、当時のマンにとってママの存在が非常に大きかったことがわかる。

結婚前のマンにママが与えた他の影響として、ママの教育を取り上げる。前述の通りママは教師であり、フランス語も理解することができた。マンが文字を書けるようになると、ママは毎晩書取り練習などを通してフランス語を教え、フランス語の小説の内容を教えることもあった。こうしたママの教

育のおかげで、マンは幼少期からフランス語や西洋の文化に触れる機会があり、移住後も言語や文化的統合に関する苦勞があったものの、次第に適応することができている。他にも、ママは料理、空気を読んで先回りする生き方、忍耐力などをマンに教えており、その教育の影響を様々な場面で確認することができる。

そして、ママは、マンに安心感を与える存在でもあった。マンの移住後、ママもケベックに移住することになったが、もともとママはマンがケベックに渡る際には自分のことを忘れ、新しい人生を切り開くチャンスを活かして欲しいと願っていた。しかし、マンは忘れることができず、長年説得し続けた結果、ママの移住が決まった。ケベックに来てからは、ママはマンの子どもたちの勉強の面倒を見て、レストランの厨房を手伝うなどマンの生活面の支えとなるだけでなく、リュックとの別れの際の精神面のサポートも行った。

結論として、ママはマンを教育し、夫との出会いにも関与するなど、幼少期から結婚前までは積極的にマンの人生に影響を与えていたと分析することができる一方、マンのケベック移住後は、自分を忘れるように望み、マンの代わりに子どもたちの面倒を見るなどマンの負担を軽減させる間接的な支え方へと移行し、マンの成長や変化を見守るようになったことがわかった。ただ、支え方が変化した後でも、ママとのママの存在自体がマンを支え、安心感を与えていたことから、その影響力が減少してはいないと分析することができる。

### 3.2. ジュリー

本節で分析するジュリーは、マンの夫が経営するベトナム料理店の客であり、ベトナムで子どもを養子に迎えている。2人が仲良くなると、ジュリーはマンを外に連れ出すなどしてマンにレストランの外の世界を教え、マンはジュリーにベトナム料理の調理法を教えた。そして、マンはジュリーの娘にとってのベトナム人の母となり、互いにとって重要な存在となった。

ジュリーは、マンの人生をより豊かにしてくれた存在である。ジュリーはマンのために、料理店の隣家を調理アトリエとして使えるようにしてくれた。アトリエを開くと、ジュリーは何ヶ月も休まずにマンと共に働き、試食付きのベトナム料理教室のプログラムを立ち上げようと持ちかけた。マンは、このプログラムの最初の参加者が来た時のことを、「人生が私の方へ向かってきた。(中略)同じように、私の名前一翡翠色のグリーンで皿や袋、

ショーウィンドーに書かれた『マン』一からも声がするようになった<sup>8)</sup>』と語っている。先述のように、マンが名前の意味に縛られこれ以上何も望むことができないと考えていたことを考慮に入れると、名前が声を持つようになったということは、その意味にとらわれずに「マン」という1人の人間として何かを望み、より豊かな人生を目指して行動できるようになったことを意味していると分析できる。このことから、ジュリーの助けによって、マンは自分の人生に対してより積極的になれたことがわかる。

また、ジュリーのストレートな愛情表現や表情豊かに話をする様子はマンにとって珍しいものであり、ベトナムとケベックの文化の違いを知る機会となった。マンは、ジュリーに対して言葉で感謝を伝えることができず、代わりに彼女をよく気遣うことで感謝を示そうとした。ここに、愛情を言葉で表現するケベックの西洋的な文化と、行動で表現するベトナムの東洋的文化の違いをジュリーとマンが体现していることを確認できる。

さらに、ジュリーはマンだけではなくマンの子どもたちとも関係性を深めていき、子どもたちにとってケベック人の母のような存在となった。その親密さにマンは安心し、「自分なしでも、私のいなくなった後でも、関係が深まり、続いていくように身を引<sup>9)</sup>」いた。これは、いずれ夫と別れて子どもをケベックに残し、リュックと一緒にいることをイメージしていると考えられるが、自分の子どもたちを託したいと思えるほどにマンがジュリーを信頼していることが表れている描写と読み取ることができる。

結論として、西洋の価値観の中で育ち、それを体现するジュリーの姿は、ベトナムの東洋的価値観の中で育ち、名前の意味に縛られて生きてきたマンの目には、新しく、魅力的に映っていたことだろう。加えて、アトリエの開設やレシピ本の出版によってマンの人生は大きく変わっていることから、ジュリーはマンのケベック移住後の人生の発展において、不可欠な存在であったことがわかる。

### 3.3. ホン

本節で取り上げるホンは、レストランの厨房でマンを手伝ってくれることになったベトナム人女性である。ホンは、サイゴンのカフェで働いていた際に客としてやってきたケベック人男性と結婚し、ケベックに渡った。ホンは、アルコール中毒の夫から暴力を振られることもあったが、我慢して娘のために毎日昼夜を問わず働き、夫の代わりに彼の仕事である芝刈りを引き受ける

こともあった。その際の顧客の1人がジュリーであり、ジュリーの推薦でホンはレストランで働くようになる。ホンが手伝ってくれるようになったおかげで、マンは厨房を離れてアトリエの運営やアイデア集めに時間を割くことができた。

ジュリーがホンの夫からの暴力によってできた身体の青あざを発見したことにより、ホンと彼女の娘は、夫の家からマンのアトリエの隣のアパルトマンへと移った。ホンは「頭の前から進んで行き、夜を遠ざけ、殴られても無視して、自分の身体を盾として使って、ベトナムに送り返される脅威から彼女の娘を守<sup>10)</sup>」り、その結果、ホンと娘はケベックに残ることができた。このエピソードから、自分を犠牲にして娘を守ろうとするホンの姿を確認することができる。これは、マンの行動にも似ており、我慢、忍耐などのベトナムの東洋の考え方や価値観が表れていると分析することができる。

全体を通して、ホンはマンの仕事面を支えただけでなく、自分と同じように結婚を機にベトナムからケベックへ移住し異国の地で生き抜く女性として、マンのことを鼓舞する存在でもあったと推測できる。また、ホンは、移住後もベトナムらしさを内面化しており、ベトナム出身であるマンのアイデンティティやベトナムの価値観を思い出させてくれる人であった。もし、マンが仕事をする上で家族以外にジュリーとのみ関わっていたら、彼女に対する劣等感や、ケベックに馴染みきれない不安を感じる可能性があったが、ホンがいることにより自分のベトナム的な側面を認め、守ることができたのではないかと考察する。

### 3.4. まとめ

本章の分析により、ママが東洋的価値観を教えマンの人生の基盤を作り、ジュリーがケベック移住後のマンの人生を広げる手助けをし、西洋の文化や価値観をマンに教え、ホンが、マンを仕事面で支えると同時に彼女のアイデンティティを思い出させているという影響を与えていたことがわかった。この三者からの影響は、バランスが取れているように思われる。ママの影響により物語の始めのマンはベトナムの東洋らしい価値観を持っていたが、ケベック移住後、ジュリーからの影響が加わり、西洋的な価値観に触れながらマンの人生は大きく変化していった。そこに、ベトナム出身のホンがいてくれることによって、マンはベトナム人としてのアイデンティティを肯定することができたのではないかと考察する。このことが、マンがケベックでベト

ナム料理という自身のアイデンティティに基づいた手段を用いて成功することができた理由につながっていると考えられる。

第1章でも述べたように、『満ち足りた人生』は夫とリュックの2人の男性との関係が物語の主軸のように思われるあらすじとなっているが、本章での考察から、夫との結婚生活や、リュックとの愛人関係を持つ間のマンを支えてきた女性登場人物たちがマンに与えた影響も大きく、物語において重要な役割を果たしているといえるだろう。

#### 4. ケベック女性文学史における作品の位置付け

本章では、第3章での女性登場人物たちの分析を踏まえ、ケベック女性文学史における『満ち足りた人生』の位置付けを考察していく。

まず、先述のように1980年代以降、ケベック女性文学作品で扱われるテーマは直接的なフェミニズムから、文化の差異やアイデンティティに関するものへと変化したが、『満ち足りた人生』でも同様に、移民経験やアイデンティティに関する問題を題材としている。この点から、本作品のテーマはケベック女性文学の潮流に乗っていると考えることができる。

続いて、第2章第2節で取り上げた1980年代以降のケベック女性文学で見られるテーマのうち、母と娘、暴行と暴力、移住と亡命の3つが作品で使用されていることを確認する。まず母と娘のテーマは、マンがママから大きな影響を受けていることだけでなく、マン、ジュリー、ホンとそれぞれの娘たちなど、多くの母と娘たちが登場することからも作品において重要であると考えられる。また、マンとママや、マンとジュリーの娘、ジュリーとマンの娘といった血縁や国籍に縛られない多様な母娘関係も確認できるが、Boisclair (2014)でも、ケベック女性文学における母と娘の関係性の多様化が指摘されている。

次に、暴行と暴力のテーマは、ホンの夫による暴力とそこから逃げ出すホンと娘のエピソードで登場している。Boisclair (2014)は、主に性的暴行について論じており、暴力による巻き添え被害が見られる作品を取り上げている。ホンの場合は性的暴行ではなくとも、夫からの暴力に耐え、ベトナムへ送り返される脅威から娘を守っていたことから、夫の暴力が身体的にだけでなく精神的な負担にもなっていることがわかる。そのような女性登場人物がいることは、Boisclair (2014)の指摘する女性文学的特徴に一致している。

そして、移住と亡命のテーマは、マンとホンのケベックへの移住や、ホン

の亡命失敗のエピソードに確認することができる。Boisclair (2014) は、移民女性作家は女性と移民という二重の他者の立場にあることから、作品中に特異な歴史が語られている特徴があると指摘している。本作品でも移民経験が語られ、マンもホンも結婚を機に移住していることから、その語りが女性と移民の両方を掛け合わせて構成されていることがわかる。

また、Hernández (2019) でチュイの作品には従来の自伝文学の特徴に一致しない点があると指摘されているが、ベトナム料理店の経営やレシピ本出版は著者の人生と重なり、自伝的要素を持ち合わせていると捉えることができる。以上より、『満ち足りた人生』はこれまでの女性文学と共通する特徴を持ち、その歴史の中に位置付けられると考える。

次に、これまでのケベック女性文学作品と比較し作品の新しい点や、特徴的な点を確認する。真田 (2017) は『小川』を分析し、それまでのアジア系移民作家の多くが成年になり自らの意思でケベックへ移住したため祖国をしばしば批判的に描きケベックを相対化するために扱っているのに対し、チュイは難民として幼年期に移住を余儀なくされたため、作品には祖国とケベック双方に肯定的であるという魅力があると述べている。これは、『満ち足りた人生』に関しても当てはまる指摘であり、作中で語られているベトナムとカナダの国や文化に対して、マンは優劣をつけることなく、双方に肯定的である。

そして、第3章より、作品での女性登場人物の描かれ方の分析においても、主人公がベトナムとケベック双方の女性のから良い影響を受けて成長していることが明らかになった。ケベックの女性をより優れた存在として捉え、自分のアイデンティティを否定し消し去るのではなく、双方の文化を受け入れて「マン」という個人として生きていく姿は、それまでのケベック女性文学では見られなかった移民女性の姿であるといえよう。この点から、本作品はケベック女性文学においても新しい特徴を持つ作品であると考えられる。

以上より、結論として『満ち足りた人生』は、使用されているテーマにはこれまでのケベック女性文学との共通点を確認することができるが、移民女性の表象としては主人公のマンがケベックと出身国ベトナムのどちらにも肯定的であり、2か国の文化を内面化しながら生きているという点に作品の個性と特徴があるとまとめることができる。

## 結論

本稿では、『満ち足りた人生』における女性登場人物たちの表象と主人公

マンの人生に与えた影響を分析し、その結果を踏まえて作品のケベック女性文学史における位置付けを考察した。分析の結果、マンはベトナムで過ごした幼少期にママから大きく影響を受け東洋的価値観を持って育ってきたが、ケベック移住後はジュリーと出会いケベックの西洋的な文化や社会に馴染んでいくようになったことがわかった。マンはジュリーの協力を受け、ベトナム料理を通して人生を切り開くことができたが、その成功は自身と同じくベトナムから移住したホンや、マンのためにケベックへ移住したママの支えがあってこそのものであった。このように周囲の女性たちに支えられながらベトナムとケベックでの生活を経験し、双方の文化や価値観を肯定的に捉えられたことが、マンがケベックでベトナム料理という自身のアイデンティティに基づいた手段を用いて成功できた理由であった。

また、作品の特徴やテーマは、ケベック女性文学の先行研究で論じられているものと共通しており、その歴史の中に作品を位置付けることが可能だと考えられる。一方、作品の新しい点として、既存のケベック女性文学のうち移民女性作家の作品では、祖国が批判的に描かれているのに対し、本作品では、マンがベトナムにもケベックにも肯定的かつ双方の文化を内面化しながら生きていることが挙げられる。ここに、これまでのケベック女性文学作品との違いを見出すことができる。

本稿の課題として、まず、ママ、ジュリー、ホンの3人以外の女性登場人物が作品の中で担う役割の分析を行えなかったことが挙げられる。彼女たちのエピソードが語られる意味や効果を分析することによって、より多角的にケベック女性文学という観点からの考察が可能になるだろう。他の課題として、ケベック女性文学史における作品の位置付けの考察にとどまった点が挙げられる。チュイの作品が他のフランス語圏でも高く評価されていることや、ケベックが間文化主義を採用しフランス語圏の連帯において重要な役割を担っていることから、フランス語圏全体の文学における作品の位置付けや役割を研究することも必要だろう。

## 注

- 1) 例えばLobka (2017) では、表現技法としての料理への言及について、家庭の台所という女性的空間における親密さは、時に政治的、社会的、文化的な意味を持ち、食事を分かち合うという基本的な行動が女性たちの意見を表現するツールになり、可能性のある人生の場所をもたらすことになると述べている。
- 2) 本稿での女性文学の定義付けにあたり、ケベック女性文学に関する先行研究で

ある山出（2009）を参考にした。山出はケベック人の女性によって書かれた文学作品を「ケベック女性文学」として分析し、そこで描かれているケベック女性の姿や女性たちが作り上げた文化を明らかにしている。

- 3) 山出裕子（2009）『ケベック女性文学—ジェンダー・エクリチュール・エスニシティー』彩流社、pp. 30-34。
- 4) 山出裕子（2014）「北米フランス語圏文学の歴史と動向—ケベックの女性文学に関する一考察—」『文芸研究』104号、pp. 102-115。
- 5) BOISCLAIR, *op. cit.*, pp. 43-52.
- 6) 山出（2014）、前掲論文、pp. 98-102。
- 7) « Elle m'a donné une seconde naissance ... » (THÚY, Kim, Mãn, Montréal, 2013, p. 10).
- 8) « La vie venait vers moi (...) De la même manière, une voix a émergé de mon nom - « mãn » - écrit en vert jade sur les assiettes, les sacs, la devanture. » (*Ibid.*, p. 73).
- 9) « ...je me retirais afin que la relation entre eux puisse s'approfondir et exister sans moi, après moi. » (*Ibid.*, p. 136).
- 10) « Elle avançait la tête la première en écartant ses nuits, en faisant abstraction des coups, en utilisant son corps comme un bouclier pour protéger sa fille contre la menace de se faire renvoyer au Vietnam, ... » (*Ibid.*, p. 92).

#### 参考文献

- BOISCLAIR, Isabelle et Catherine Dussault FRENETTE (2014) « Mosaïque : l'écriture des femmes au Québec (1980-2010) » *Recherches féministes*, Vol.27, No2, pp. 39-61.
- HERNÁNDEZ, Ángeles (2019) « L'œuvre de Kim Thúy: une écriture née de la fêlure biographique », *Annales de Filología Francesa*, No27, pp. 311-330.
- LOHKA, Eileen (2017) « Senteurs de l'ailleurs : Mémoire culinaire chez Kim Thúy », *Nouvelles Études Francophones*, Vol. 32, No2, pp. 184-194.
- 真田桂子（2017）「ベトナム系仏語表現作家キム・チュイにみる難民の語りと脱周縁的創造力」『阪南論集 人文・自然科学編』52巻、第2号、55-64頁。
- THÚY, Kim (2013) *Mãn*, Libre Expression.
- チュイ、キム著、関未玲訳（2023）『満ち足りた人生』彩流社。
- 山出裕子（2009）『ケベック女性文学—ジェンダー・エクリチュール・エスニシティー』彩流社。
- 山出裕子（2014）「北米フランス語圏文学の歴史と動向—ケベックの女性文学に関する一考察—」『文芸研究』104号、95-118頁。